

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

現在、日本を舞台にチャリティ・ウォークを展開中のリチャード・ダンウッドディ元騎手（53歳）が、今月のJRAのコラムの主役である。彼の名が日本のメディアで取り沙汰されるのは、ここ数ヶ月ほどの間で2度目のことだ。

一度目は、昨年11月。筆者が聞き手となつてライアン・マーク騎手のインタビューを某競馬週刊誌に掲載したのだが、今を時めくライアン・マークが、尊敬する騎手として真っ先に名を挙げたのがダンウッドだつたのだ。

ダンウッドディとは、80年代から90年代にかけて、英国を拠点に活躍した障害騎手である。

北アイルランドのベルファストで生まれた彼は、父がボイント・トゥ・ボイント競走のツップレイダーだったこともあり、3歳の頃にはポニーを乗り回し、5歳の頃には「将来は騎手になる」と宣言していたそうだ。8歳の頃に移り住んだイギリスでアマチュア騎手としてデビューしたのが18歳の時で、2年後にプロに転向。その後に2年後には、ウエストティップに騎乗して1度目のグランプリナショナル制覇を果たしているから、騎手としての出世はトントン拍子であった。

その名を一躍高め、そして今もなお、リチャード・ダンウッドディと言えばあの馬と、オールドファンの誰もが思い出すのが、80

年代終盤から90年代初めにかけて「ハピケン」を組んだ名馬デザートオーキッドだつた。ケンプトンのG1キングジョージ6世チャイスを実に4度制した「デザートオーキッド」だが、このうち89年と90年は、ダンウッドディを背に勝ち取つた優勝だつた。

92／93年シーズンに待望の初リーディングを獲得すると、これを皮切りに3季連続でリーディングの座に君臨。この間の94年にはミネホーマに騎乗して2度目のグランプリナショナル制覇を果たしていく。馬を置いたのは98年で、通算勝利度数の1699は、英國の障害騎手としては当時の最多記録だつた。

引退後の彼が熱心に取り組んでいるのがチャリティ活動だ。それも、自らの肉体を酷使することで、共感を得た市民から基金を募り、これを寄付に廻すという試みを何度も行つてゐる。例えば09年には、ニューマーケットのバリーロードを往復しながら、1000時間で1000マイル歩くチャリティ・ウォークを敢行。レスター・ピット、ヒュー・マッコイ、フランキー・デトリー、更にはシェイク・モハメドまでが、部分的に参加したこのイベントは大きな話題を呼び、総額で15万2千ポンドもの寄付を集めることに成功した。

その他の名が今、再び日本のメディアに取り上げられているのは、現在の彼が北端の宗谷岬まで予定では3か月半ほどかけて、2000マイルの距離を徒步で踏破しようとしているのである。目的は、Sarcoma（＝肉腫）と称される、骨や軟骨といった組織に発生する癌に対する、研究と治療の財源確保だ。14年の世界ジョニアボート選手権に英國代表として出場したほど、壮健な肉体を誇った甥のジョージ・ダンウッドディさん（21歳）が、肉腫と診断されたのは今から1年半ほど前のことだつた。若くして癌との闘いを強いられたことになつた甥のために、ダンウッドディは新たなチャリティ・ウォーキーの実行を決意したのだ。

ウォークの舞台に日本を選んだのは、旅作家のアラン・ブースが書いた「The Roads to Sata（佐多への道）」といふ本に、感銘を受けたからだといつ。2年ほど前に、来日して佐多岬を歩くという長年の夢をかなえた彼は、再訪の機会を待ちわびていたそつだ。

チャリティ・ウォークの主旨に賛同し、寄付を行いたいという方は、下記のウェブサイトが窓口となる。

<https://www.justgiving.com/fundraising/Japan4SarcomaUK>

まだ馬術雑誌の Maraque（馬楽）編集部が、日本における問合せ先となつてゐる。

milky@maraque.jp